The Scarlet Letter における Pearl の役割

Pearl's Role in *the Scarlet Letter*

木　村　洋　子

Hester と Dimmesdale の罪の結果生まれてきた子供であるため，Pearl は悪魔の子とか，姿全体の特色から生命を与えられた緋文字とか，と町の人々から言われている。そのように表現される彼女の存在と行動は，Hester, Dimmesdale, あるいは Chillingworth にどのように働きかけ反応を示し，どのような象徴としてこの小説の中で役割を果たしているのであろうか。

Hester に対する Pearl の役割は，まず彼女の存在ということがあげられる。Pearl には，常に日光があたっていて，彼女の回りは，光でいっぱいになっているため，光のイメージを我々に与える。そのように，Pearl の存在そのものが，Hester の罪を光により明るみに出す働きをする。もしも，Pearl が生まれてこなかったら，Hester の罪は永遠に明らかにされなかったかもしれないが。Pearl は誕生から，Hester の罪に作用し，秘密の現われた象形文字として働くのである。

> as the living hieroglyphic, in which was revealed the secret they so darkly sought to hide, — all written in this symbol, — all plainly manifest, — had there been a prophet or magician skilled to read the character of flame ! (1)

Pearl は Hester にとって二つの面を持つ。それは，彼女に生きる力を与える "the object of her affection" (2) であり，又彼女に罪を忘れさせない "the emblem of her guilt and torture" (3) との二面である。罪の結果 Hester は，町の人々とは交流を断ち，孤独になるが，愛の対象物である Pearl の存在により生きる力を与えられ，精神的に全く孤独になるのを救われる。この点 Dimmesdale は Hester と違って町の人々とは物質的には交流があっても，Hester における Pearl のように，精神的に交流する人物がいないため罪の結果全く精神的な孤独に落ち入ってしまう。

もう一つの面において Pearl は Hester に子供らしい質問をしたり，しぐさによって犯した罪を常に思い出させ，彼女につらい思いをさせ，結局は苦行をさせる。あまりに Pearl が，緋文字の意味について執拗に質問をするため，時には Hester には，悪鬼の子として映ることもあるほどである。このことは，Pearl が本当に悪鬼の子という意味ではない。Pearl に

よって，Hester の心の傷に幾度となく触れられたり，過去の罪を指摘されるため，ふと我が子が悪鬼の子にみえるような錯覚を起こしてしまうのである。それ程 Pearl の動作が Hester にとっては，苦行になるということである。

このような Pearl を Hester は，次のように語っている。

> Pearl punishes me too ! See ye not, she is the scarlet letter, only capable of being loved, and so endowed with a million-fold the power of retribution for my sin ? (4)

彼女に苦痛を与え苦行を強いる Pearl は，文字通りの緋文字となる。"It was the scarlet letter in another form; the scarlet letter endowed with life !" (5) 緋文字の役目を象徴するように，Pearl の姿は真紅の上衣に包まれて，焔のように工夫されているのである。

Pearl の役割は，これだけではない。まだ，重大な役目が残っている。それは，Hester に再び罪を犯さないようにさせることである。

Hester と Pearl は，知事の邸宅から帰る時に，Mistress Hibbins に会う。その時 Hester は森へ行くように誘われるが，Pearl の存在のお蔭できっぱりと断わることができる。"Even thus early had the child saved her from Satan's snare." (6)

又 Hester は，世間と交渉を閉ざして長年生活をしてきた結果，思索の自由を身につけていた。この思索の自由は，当時のニューイングランドの環境においては，緋文字で非難された罪よりももっと重大な罪であった。彼女はこのような危険な思想を内面ではめぐらしていたが，考えるだけで行動には移さなかった。もし Pearl という存在がなかったら，違っていたであろうが。"Yet, had little Pearl never come to her from the spiritual world, it might have been for otherwise." (7)

さらに，Pearl は Hester と Dimmensdale が，再び重大な罪を犯そうとするのを妨げようとする。Dimmensdale と森で再会した Hester は，彼のあまりのやつれ方をみて，Chillingworth の復讐の手から逃げるために，外国へ逃亡する計画を提案する。その時彼女は，髪をほどきAの文字を胸からはずす。しかし，Aの文字をはずした彼女に，いくら呼ばれても Pearl は近づこうとしない。この Pearl の行動は，Hester が犯そうとしていることに，明らかに反対の意を表明していることになる。

以上のような Pearl の Hester に対する使命とも言える役割は，Richard Harter Fogle が認めている。

> Pearl is pure symbol, the living emblem of the sin, a human embodiment of the Scarlet Letter. Her mission is to keep Hester's adultery always before her eyes, to prevent her from attemping to escape its moral consequences. (8)

Pearl は，このように Hester の罪を明るみにし，犯した罪を常に彼女に意識させ，彼女に苦行をさせてきた。罪の生きた象徴，生きた緋文字としての Pearl の Hester への役目は，Dimmesdale が罪の告白をしてしまい，Hester も再び罪を犯すとは考えられない時点で終わる。"Towards her mother, too, Pearl's errand as a messenger of anguish was all fulfilled." (9)

次に Dimmedale に対する Pearl の反応，あるいは，役割を追求してみる。Pearl の彼への働きかけは，Hester に対する程直接的ではないが，やはり同じように罪の秘密に強い関心を示し熱心に追求しようとする。

Pearl が，Dimmesdale の隠された罪を明るみに出そうとして，Hester に質問する時は，必ず緋文字の意味と牧師が胸に手を当てている理由とを結びつけている。又，別の箇所では，両者が，同じ意味を持っていることを暗示している。これは子供の持っている，あの独特な六感であると，簡単には済まされない。言い難いような特別な察知で，Pearl は A の文字の意味と牧師が胸に手を当てている理由，つまり，彼の罪とが一致していることを見ぬいている。

又，Pearl は，Dimmesdale の罪の告白を公にしようとする働きをする。Dimmesdale が懺悔のために処刑台に，夜1人で立っているところへ Hester と Pearl が通りかかり，三人いっしょに処刑台に立つ場面がある。その時，Pearl は彼に尋ねる。"With thou stand here with mother and me, tomorrow moontide?" (10) ここでは，Dimmensdale は Pearl の要求には応じない。しかし，この場面から，Pearl が彼に，隠れた告白でなく昼間民衆の前で公に告白するように促しているということがわかる。

Dimmesdale が，公に告白をする決心をして，処刑台に立とうとした時には，Pearl は，彼のところへ飛んで行き，彼の膝のまわりにだきつく。これら Pearl の動作は，明らかに，彼の公での告白に賛成の意を表していると言える。

さらに，Dimmesdale が告白できない理由と，彼のあいまいな告白は，結局は彼が嘘を付いたことになってしまっていることも，Pearl は彼に指摘している。"Thou was not bold! — thou wast not true!" (11) これらの Pearl の一連の行動を取り上げてみても，普通の子供とは，全く思えないような印象を強く我々に与える。

Hester に対するのと，同じ役目を Dimmesdale に対しても Pearl は果たしている。それは，彼が罪を再び犯すことを妨げようとすることである。Hester と Pearl に森で会った時，Pearl の額に彼は接吻をする。しかし，彼女は，接吻された額を小川で洗い流す。なぜならば，その時 Dimmedale が罪の意識に耐えかねて，外国へ逃亡しようと考えていたからである。彼が地獄へ落ちるような罪を犯そうとしているのを，Pearl はこのような態度で止めようとするのである。

Pearl の Hester, Dimmesdale に対する反応は，彼等の行動，考え方に対するバロメー

ターのようである。

バロメーターとしての Pearl は，知事の邸宅で，Dimmedale と会った時にもうすでに働いていた。Pearl は， Dimmesdale が Hester と彼女のために，熱心に弁護してくれた後で彼に優しく愛撫している。彼の弁護は，あの時の Hester にとって，又 Pearl が Hester に重大な使命を果たすためには，必要であったからである。

Pearl は，このように，あからさまには語らないが，徐々に Hester や Dimmedale を導いてゆくことになるのである。

Chillingworth に対しては， Pearl は直接言葉を交えることもないし，働きかけることもない。しかし， Chillingworth が悪魔の化身のような人物であり， Dimmesdale を復讐のため，彼のえじきにしていることを，Pearl は指摘している。

> "Come away, mother! Come away, or younder old Black Man will catch you! He hath got hold of the minister already. Come away, mother, or he will catch you! But he cannot catch little Pearl!" (12)

Peael は，その上に Chillingworth が A の文字の意味と，牧師が胸に手をおくわけが同じであり，そのわけを Chillingworth が知っていることも暗示している。

> "What has the letter to do with any heart, save mine?"…. "Ask yonder old man whom thou hast been talking with! It may be he can tell…." (13)

このような Pearl の超能力とも言うべき，察知は Richard Harter Fogle も指摘しているように単なる平凡な子供のわざとは思われない。

> Pearl's childish questions are friendly apt; in speech and in action she never strays from the control of her symbolic function; her dress and her looks are related to the letter. ….
> Yet despite the undeviating arrangement of every circumstance which surrounds her, no single action of hers is every incredible or inconsistent with the conceivable actions of any child under the same conditions. (14)

平凡な子供としてみたら，Pearl はあまりにも気まぐれで，優しい所もあるが，真実を追求しようとする時には，無情で冷酷であるとさえ言えるかもしれない。その上，まだ道徳の教育をされていなくて，自然の非道徳の象徴とみなされるかもしれないが，Hawthorne は，Pearl をそのようには考えていない。Pearl が，そのようにみえるのは，*The Sarlet Letter* において，重大な使命を課せられているためである。

秘密の現われた生きている象形文字とか，生命を与えられた緋文字とか，悪鬼の子とか言わ

れる，Pearl の象徴としての使命は，小説の始めから Dimmesdale が罪の告白をする時まで続く。その間，Hester，Dimmesdale には，考え方の変化が起きるが，Pearl はずっと変わらない。"Pearl, of course, does not change except at the end when she loses her allegorical function and becomes humanized. (15)

Pearl に変化が起きる時が彼女の使命の終わる時である。Dimmedale が，公に罪の告白を済ませる時に，彼女の使命が終わる。

> Pearl kissed his lips. A spell was broken. The great scene of grief in which the wild infant bore a part, had developed all her smpathies; and as her tears fell upon her father's cheek, they were the pledge that she would grow up amid human joy and sorrow, nor forever do battle with the world, but be a woman in it. (16)

Dimmedale を自らの自由意志での告白へと導き，Hester にはつらい苦行をさせ，罪の許しへと導く Pearl の役目は，これ以上彼女が彼等に対して力を働かせなくてもよい時点で終わる。

使命を終えた Pearl は，まじないがとけて，これまでの人間の子供らしくない寓話的な役割から，完全な人間的な存在となる。この時から，彼女の女性としての，人間らしい生活が始まるのである。彼女は，Chillingworth の遺言により，新世界で一番の金持ちの女相続人となる。彼女が金持ちになるということは，彼女が現世の存在になったということのしるしである。このことに関しては，Roy R. Male が触れている。

> She shifts, as it were, from her role as the universal principle in the spiritual realm .... to a key role in the novel, the social world, whose basic medium is money. (17)

Hawthorne は，Pearl を金持ちにして，社会的地位を与えて，Boston から旧世界へもどした。これらのことは，彼女が現世の存在となったあらわれだけではない。ここに，清教徒主義に対する Howthorne の反感が表われていると読み取れる。

> Pearl's immense wealth, her noble title, her Lavish and impractical gifts to Hester, and of course her successful escape from Boston all serve to disparge the Puritan sense of reality. (18)

そして，Hawthorne が Pearl に課した重大な役割がここに出てくる。それは，非清教徒的世界の代表としての Pearl である。清教徒の代表とも言える町の人々は，Pearl のことを "a demon offspring" (19) と呼んだ。罪の結果生まれてきた子供であり，父親が不明のため

と，風変りな性質のため，悪魔の子と呼ぶのは，New England の清教徒の間では，めずらしいことでもなかった。つまり，清教徒の人々にとって，その頃から Pearl は非清教徒的性格であったのである。又，Dimmedale が罪の告白をして，Pearl の父親が知れた後でさえも，Pearl のことを鬼子だと言い張る人々もいる。"…the elf-child,—the demon offspring, as some people, up to that epoch, persisted in considering her,..." (20)

大きな罪を犯したにもかかわらず，町の人々は Hester の善行を認めて，Aの文字を，Angel 又は Able の頭文字と解釈して，尊敬して彼女を見るようになるのに，Pearl のことを鬼子と呼び続けるのはなぜであろうか。それは，Pearl の変わらない非清教徒的世界の代表という役割のためである。

ところで，Dimmedale は告白を最後に息をひきとり，Chillingworth は復讐の目的を失い，生きる目的も失い死んでしまう。Hester は一度は，Boston を離れるが，再びもどってきて，自ら再びAの文字を胸に付ける。Hester は Boston から，言いかえると，罪の意識からうまくぬけ出るが，やはり完全には抜け出れないと悟りもう一度もどってくる。彼女のこれまでの告白や，懺悔は自ら行ったものではなかった。社会から，あるいは Pearl から間接的に強いられたものであった。彼女が，罪の意識から逃げられるためには，自由意志での懺悔が必要であったのである。

Dimmesdale と Hester は，罪の許しに必要な自由意志での告白も，懺悔も済ませるが，それでもなお，彼等の墓石には，"ON A FIELD, SABLE, THE LETTER A, GULES" (21) と刻まれる。これは，Hawthorne の罪に対する厳しい考えのあらわれである。たとえ罪は許されたとしても，罪によってついた魂のしみは永遠にぬぐいさることができない，つまり罪は罪として永遠に残るということである。

ここで，もう一度，Pearl が金持ちになり，りっぱな婦人に成長して幸福な結婚生活をすることができるようになるということについて考えてみよう。

彼女が莫大な財産を手に入れるようになること，すなわち，非清教徒的世界の代表である Pearl の成功は，確かに，Hawthorne の清教徒主義に対する反感に由来する。しかし，彼女のみが幸福になるということも考えてみると，これらのことに含まれている意味は，それだけではない。Hester, Dimmedale, Chillingworth の三人と，Pearl の異なる点は，彼等は罪を犯しているが，彼女のみが罪を犯していないということである。この重大な違いのために Pearl のみが幸福になれたのである。彼女のみが，魂に汚点を持たない，清められた，救い出された魂の持主である。それは，Pearl という彼女の名前の由来が示す通りである。

> She possesses "a native grace". In naming her, Hester has identified the child with the pearl of great price (Matt, 13: 45-46) the *pretiosa margarita*. This pearl has often been interpreted as Christ by the theologians, but it has also been construed as everlasting life or beatitude-

the soul, either undefiled or redeemed in baptism. (22)

永遠の生命，あるいは，永遠の幸福とまで解される Pearl の名前が示すように，彼女は，"a holy spirit" (23) である。この清められた魂の象徴ということが，Pearl が果たしているもう一つの役割である。

以上みてきたように Pearl は，使命として Hester や Dimmesdale に直接に，あるいは間接に大きな役割を果たしてきた。しかし非清教徒的世界の代表として又は，清められた魂の象徴として，もっと大きな役割を荷なって Hawthorne の清教徒主義に対する考え方，あるいは罪に対する厳しい考え方を我々読者に訴えてきたのである。

Notes

(1) Nathaniel Hawthorne, *The Scarlet Letter The Complete Novels and Selected Tales Nathaniel Howthorne* (New York, The Modern Library, 1937), pp. 206—207.
(2) *Ibid.*, p. 144.
(3) *Ibid,*
(4) *Ibid.*, p. 150.
(5) *Ibid.*, p. 143.
(6) *Ibid.*, p. 153.
(7) *Ibid.*, p. 181.
(8) Richard Harter Fogle, *Hawthorne's Fiction: The Light & The Dark* (Norman, University of Oklahoma Press, 1952), p. 114.
(9) Nathaniel Hawthorne, *op. cit.*, p. 236.
(10) *Ibid.*, p. 174.
(11) *Ibid.*, p. 177.
(12) *Ibid.*, p. 163.
(13) *Ibid.*, p. 190.
(14) *Richard Harter Fogle, op cit.*, p. 114.
(15) Roy R. Male, *Hawthorne's Tragic Vision* (New York, W. W. Norton & Company, Inc, 1957), p. 103.
(16) Nathaniel Hawthorne, *op. cit.*, p. 236.
(17) Roy R. Male, *op. cit.*, p. 97.
(18) Frederick C. Crews, *The Sins of the Fathers: Hawthorne's Psychological Thems* (New York, Oxford University Press, 1966), p. 151.
(19) Nathaniel Hawthorne, *op. cit.*, p. 142.
(20) *Ibid.*, p. 238.
(21) *Ibid.*, p. 240.
(22) Roy R. Male, *op. cit.* pp. 94-95.
(23) *Ibid.*, p. 95.

Bibliography

Crews, Frederick C. *The Sins of the Fathers: Hawthorne's Psychological Themes*, New York Oxford University Press, 1966.

Fogle, Richard Harter, *Hawthorne's Fiction: The Light & The Dark*, Norman, University of Oklahama Press, 1952.

小山敏三郎，「ホーソンの世界」，萩書房，1968.

Lawrence, D.H. *Studies in Classic American Literature*, London, William Heinemann Ltd., 1971.

Male, Roy R., *Hawthorne's Tragic Vision*, New York, W. W Norton & Company, Inc., 1957.

Martin, Terence, *Nathaniel Hawthorne*, New York, Twayne Publishers, Inc., 1965.

鈴木重吉，「鏡と影」，研究社，昭和44年.

Waggoner, Hyatt H., *Hawthorne: A Critical Study.*, Cambridge, The Belknap Press of Harvard University Press, 1955.